

題目：急性期から応用的活動を積極的に用いる作業療法介入の検証

～作成した院内活動表を用いて～

保健医療学専攻・作業療法学分野・作業活動支援学領域

氏名：白砂寛基

キーワード：急性期作業療法 応用的活動 生活活動

I. 研究の背景と目的

急性期作業療法の対象者は直接自宅退院する場合も多い。なかでも高齢者は入院を契機に体力が低下したまま自宅に戻り、虚弱状態になりやすい。自宅退院する対象者には、応用動作能力の獲得を図る介入が必要と考えるが、急性期病院では徒手的な訓練や基本動作訓練が多く行われている反面、作業療法の事例報告の調査から、急性期でも様々な応用的な活動を評価し、介入していることが示されている²⁾。そこで、急性期から応用的活動を積極的に用いる介入ツール「院内活動表」の作成を試みた。「院内活動表」を用いた介入は、心身機能や ADL の改善とともに生活活動に対する意識を高めるのではないかと、また作業療法士が応用的活動を用いた介入を急性期から意識的に行うことがきるのでないかという仮説に基づき、「院内活動表」を作成し対象者への効果を検証する。その上で急性期から応用的活動を用いる介入方法の検証とその意義を考察する。

II. 方法

【研究Ⅰ】「院内活動表」の作成

＜第Ⅰ段階＞試作版院内活動表の作成：病院内で実施可能な活動を作業療法士が対象者と一緒に確認することを目的としたチェックリストを作成した。作成にあたっては、①病院内で遂行可能な活動を網羅すること、②活動を段階付けて表示すること等を方針として作成した。

＜第Ⅱ段階＞試作版の臨床試行：試作版院内活動表を用いた介入を臨床で試行し、症例検討、使用した作業療法士へアンケートを実施した。アンケートの内容は、チェックリスト使用による対象者および自らの変化、使用の感想や改善点等についてであり、書面にて行い後日回収した。

＜第Ⅲ段階＞院内活動表の作成：第Ⅱ段階の結果をもとに項目とその配置の見直しを行い、院内活動確認表を作成した。

【研究Ⅱ】急性期病院で高齢者を対象とした介入効果の検証

院内活動表を用いた介入群と対照群による準ランダム化比較試験を実施した。対象者は急性期病院に入院中の脳血管疾患、神経筋疾患、上肢の整形疾患を除く 75 歳以上の作業療法処方のある者とした。介入群では、院内活動表を参考に、毎回の作業療法時間中の 20 分を上限に、できるだけ多くの応用的活動を実施した。評価は MMSE、握力、FIM、活動意識のアンケート（日中の活動量や、できることできないことの把握等）を実施した。分析は MMSE、握力、FIM は二元配置分散分析を、活動に関するアンケートはマン・ホイットニーの U 検定とウィルコクソン符号付順位検定を用いた。いずれも有意水準は 5%とした。

III. 倫理上の配慮

国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号 13-10-215, 15-10-8）。対象者には文書を用いて本研究の主旨を説明し、同意を得て実施した。

IV. 結果

【研究Ⅰ】＜第Ⅰ段階＞チェック項目として、119 項目の活動を抽出し、試作版院内活動表を作成した。＜第Ⅱ段階＞16 事例に対して院内活動表を用いた介入を行った。対象者一人当たり 17.9±16.4 項目が実施され、119 項目中 91 項目が実施された。重症度別の実施状況は、軽度では多くの活動が行なわれ、中等度では次第により複雑で応用的な活動を行い、重度では少しでもできる活動を実施していた。作業療法士へのアンケート結果からは、対象者の活動量や意欲の変化を感じ、IADL に関する介入の幅が広がったという意見が得られたが、項目の多さや配置について使用しづらいとの意見も得られた。＜第Ⅲ段階＞症例検討の結果から、使用頻度の少ない項目を削除・集約し、最終的に 60 項目の活動に絞り込み、実施場所毎にまとめて院内活動表を作成した。

【研究Ⅱ】

介入群 18 事例、対照群 14 事例の結果では、MMSE、握力、FIM ではいずれも時間効果はみられたが、交互作用はみられなかった。活動意識についても両群間で有意な差はみられなかったが、介入前後の差では、介入群は全て有意に向上していたが、対照群では日中の活動時間において有意な差を認められず ($p=0.144$)、介入群のみ向上が認められた ($p=0.001$)。また、院内活動表を用いた事例の多くは、段階的に入浴動作や家事動作等より複雑で応用的な活動を行っていた。

V. 考察

研究 1, 2 を通じて、担当した作業療法士と対象者自身が、応用的な活動を用いる介入による対象者の入院中の活動量の増加を感じていた。研究 2 において対照群の介入内容の統制ができず、介入群と対照群の介入内容は厳密に区別できていないが、毎回異なった応用的活動を用いる点は従来の急性期作業療法介入との最大の違いである。岩上³⁾ は入院中の対象者が生活に目を向けるきっかけとして、病前生活における自身の役割を再認識する機会を持つことと、作業療法場面での家事活動の介入を挙げている。院内活動表を用いた介入は、家事動作を含む応用的活動を行うことにより、対象者が日常生活に目を向けるきっかけを作る可能性がある。

また、院内活動表を用いた介入は、段階的に家事等のより複雑な応用的活動が行われる事例が複数見られた。対照群の介入内容が統制できていないが、一般的に急性期の作業療法では心身機能や ADL の介入が多い。研究 1 において、経験年数 5 年未満の作業療法士からは、活動を用いた評価・介入の新たな視点が得られたという意見があり、特に経験年数の少ない作業療法士にとって、急性期から応用的活動を行うことを意識付けることができる可能性がある。

VI. 結語

院内活動表を用いた急性期における作業療法介入は、対象者のリハビリテーション時間以外の活動量の増加を促し、対象者の生活活動への意識を高める可能性が示唆された。また、院内活動表を用いた介入は、応用的活動を急性期から積極的に用いる機会を提供することになり、特に経験の少ない作業療法士にとって有効な方法になり得ることが示唆された。

引用文献

- 1) 日本作業療法士協会. 作業療法白書 2010. 東京: (社) 日本作業療法士協会, 2012
- 2) 白砂寛基, 谷口敬道, 杉原素子. 急性期作業療法の介入戦略の構築を目指した作業療法事例報告集 事例の分析. 国際医療福祉大学学会誌 2015;20(1):14-22
- 3) 岩上さやか, 杉原素子. 患者が自身の生活に目を向けるきっかけ—回復期リハビリテーション病棟入院経験者のインタビュー—日本保健科学学会誌. 2014;17(3):151-158.